

地元学の効用について

僕は、故郷であるこの佐世保市に戻り、その街の魅力に取り憑かれてからというもの、その歴史を学び、面白そうな場所に顔を出しては、色んな話を聞く事をこの街で暮らす一つの楽しみとしてきた。その意味で、当初この「地元学」に若干の今更感を感じたのも事実だ。

ところが、その気持ちは良い意味でさらりと裏切られた。つまるところ僕はいわゆる行政の職員としての、もしくは、自分の興味があると先に決めうちした話題だけを選んで拾っていたわけである。もちろんそれはそれで面白い。

しかし、二年ほど隣に住んでいたのに、挨拶程度しかしたことがなかったおばあちゃんの人生や、イベントに協力してもらって以来、簡単な世間話ができる仲になったある老舗和菓子屋の歴史、今回の課題がなければ、そもそも会って話をすることもなかっただろう地元の名士の来歴、焼き物の町に住む焼き物を焼かないおじさんの日常、数えればキリがないが、どれもが面白く、そしてどれもが高らかにこの地域を語っていた。

そして、この話は、本人も忘れて、あるいは、本人がいなくなってしまうことで、聞かなければそのまま失われてしまうストーリーだったのかも知れないわけだ。

この多様な声は、行政が集めたアンケートや会議で効率よく収集した意見と比べても、その意外性や多様性だけではなく、その質そのもの、その奥行きで、あるいは信頼関係を築くツールとして、負けない価値があるように感じた。

また、住む場所や年齢、話題はバラバラでも、話に通底する雰囲気や傾向のようなものに気づかされたことも興味深かった。これはなにがしかの行政活動（だけじゃないけれど）を行う上で無視できないその地域の「らしさ」を掴む上でもとても意義のあることだと思う。というか、誰かと出会い、話してみたら、実は、共通の友達がいたような面白さがそこにあった。

なにも事前に企む準備はいらないし、結果を見据える必要もない、教えてもらったフォーマットにとらわれることすらもない。むしろその方がよいのだと思う。地元学、何だか長い付き合いになりそうな予感がしている。